

# 農業技術情報

2026年4月23日

ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝普及センター十勝東部支所 015-572-3128  
JA幕別町 0155-54-4118  
JAさつない 56-2131  
JA帯広大正 64-4591  
日甜幕別原料事務所 54-2756  
幕別町農林課 54-6605

## <麦類>

### 1 秋まき小麦

#### (1) 2026年産きたほなみの生育状況と追肥判断

ほ場条件やは種時期によりほ場間差はありますので生育状況を確認しましょう。  
生育状況に応じた窒素分肥については前回技術情報および表2を参照してください。

現在小麦の生育が平年より進んでいますが、ほ場間差が大きいため、作業が遅れないよう心がけましょう。特に縞萎縮病の発生ほ場では生育が遅れ気味になりますのでご注意ください。

表1 きたほなみの生育期節（作況調査）

	2026年	平年値	早晚	
起生期	3月28日	3月30日	2日早い	※起生期:春季に至り40~50%が生長を開始し、葉の起立し始めた日
幼穂形成期	4月26日	4月28日	2日早い	※幼穂形成期:主稈の幼穂長が平均2mmに達した日

(参考) きたほなみの生育（4月23日 幕別町ゆとりみらい定点14ほ場）

	2026年			平年値 (幼穂形成期調査)
	平均	最大	最小	
茎数(本/m <sup>2</sup> )	1,570	2,312	1,021	1,889
草丈(cm)	20.7	28.9	14.9	18.7
葉色(SPAD)	48.4	54.9	44.9	46.5

定点調査では、平年より茎数は少なく草丈は長い傾向です。葉色は平均すると平年より濃いですがほ場間差が大きく、地力のあるほ場や早めに起生期追肥を行ったほ場は色が濃く、まだ追肥を行っていないほ場や縞萎縮病の発生ほ場などは色が淡い状況です。淡いほ場では早めの幼穂形成期追肥を行ってください。

表2 きたほなみの幼穂形成期窒素分肥量の目安

起生期 (4月上旬~中旬)	幼穂形成期	
	起生期追肥を見送った方 (幼穂形成期の追肥を早める方)	起生期追肥を行った方
茎数 1,000本/m <sup>2</sup> 以上 →0~2kg/10a	①縞萎縮病の症状が見られている場合 上限6kg/10a ②症状が見られていない場合 4kg/10a	4kg/10a
茎数 700~1,000本/m <sup>2</sup> →2~4kg/10a		(起生期~幼穂形成期の合計分肥窒素量が
茎数 700本/m <sup>2</sup> 未満 →4~6kg/10a		8kg/10a以内とする)

## (2) 雑草対策

雑草の生育が進んでいるため、タイミングを逃さないよう適期に散布します。は種後に除草剤を未散布、または連作ほ場は特に注意が必要です。散布に当たっては適正使用に努め、薬害の発生に注意しましょう。(表3参照)

融雪水の滞水などにより部分的に裸地となっている部分は特に雑草が繁茂しやすいため除草管理に気をつけましょう。

表3 麦類の除草剤使用例

薬剤名	処理方法・使用時期・10a使用量		回数	備考
	秋まき小麦(春期)			
エコパートフロアブル	止葉抽出前まで (収穫45日前) 50~75ml		2	展着剤、殺虫・殺菌剤と混用しない。高温時に使用しない。
MCPソーダ塩	麦の幼穂形成期 (収穫45日前) 300g		1	晴天高温時に散布する(日中20℃以上)
バサグラン液剤	小麦の幼穂形成期 (収穫45日前) 100~200ml		1	散布後の降雨により効果が劣る。雑草が大きくなると効果が劣る。
ハーモニーDF	1年生広葉雑草	ギシギシ類	1	ギシギシ類には処理後3週間から抑制効果が現れるが、効果の完成には7~8週間を要する。散布後は専用洗浄剤を使用する。
	節間伸長開始期~穂ばらみ期 (収穫45日前) 3~10g	小麦の幼穂形成期 (収穫45日前) 3~5g		

## 2 植物成長調整剤の使用

倒伏が懸念される場合は植物成長調整剤の散布も検討しましょう(表4)。今年は小麦の生育が進んでいるため、適期を逃さないよう注意します。薬害を防ぐため、どの薬剤も他剤との混用は避けましょう。

表4 植物成長調整剤の使用例

薬剤名	使用時期	使用量 (ml/10a)	使用回数	備考
サイコセルPRO	<b>幼穂形成期</b>	<b>150~200</b>	<b>1</b>	・散布時期が遅れると効果が劣る ・高温時の散布は薬害の恐れがある
	出穂前20~10日 (草丈40~60cm)	200~300	1	
エスレル10	止葉期~出穂始期	200~333	1	30%以上の出穂をみてからでは倒伏軽減効果が劣る場合があるので適期に処理する
カルタイムフロアブル	止葉期~出穂始期	150	1	過度な抑制を避けるため、使用時期・使用量を遵守し、多量散布や重複散布とならないよう注意する

## < 豆類 >

### 1 は種の準備

#### (1) 種子に合ったは種板を準備

必ず使用する種子の大きさを確認し、目標とする栽植株数（表5）となるよう粒大に合ったは種板を準備しましょう。

表5 栽植密度の目安

区 分	栽植密度 (株/10a)	畦幅×株間の目安 (cm)	
大豆： 大粒（ユキホマレ等）	8,300	66 × 18	60 × 20
コンバイン収穫等密植の場合	11,000	66 × 13	60 × 15
小粒（ユキシズカ等）	12,500～16,700	66 × 12～9	60 × 13～10
コンバイン収穫等密植の場合	27,000～30,000	66 × 5 (1粒)	60 × 6 (1粒)
小豆※ / 菜豆	8,300	66 × 18	60 × 20

※「きたろまん」は5月下旬は種において、1.5倍程度（25,100本/10a）までの密植により、成熟期の前進と増収が期待できる。ただし、倒伏が増加する事例があるので生育旺盛なほ場では標植とする（H31指導参考）。

#### (2) は種適期

は種は地温が十分に上がり（10℃以上）、遅霜の影響がなくなる時期になってからとします。地温が上がらず土壤水分が高いと出芽まで時間がかかり、タネバエの被害が懸念されます。

#### (3) 種子消毒

\*薬剤による種子消毒を徹底し、欠株や生育遅延を回避しましょう（表6）。

- ① ダイズわい化病は、ジャガイモヒゲナガアブラムシが媒介して発生します。春先からの気温が高いと有翅虫の飛来が早まります。
- ② タネバエは牧草地跡や未熟有機物施用ほ場、土壤水分が高いほ場で多発します。発生が懸念される場合には、種子粉衣を実施しましょう。

表6 豆類種子処理剤例

薬剤名	使用量 (種子60kg あたり)	回数	対象病害虫									
			大豆				小豆・菜豆					
			立 枯 病	苗 立 枯 病	紫 斑 病	タ ネ バ エ	ナ ジ ガ ヤ ア ガ ブ ラ ム シ ヒ ゲ	立 枯 病	褐 斑 細 菌 病 (小豆)	か さ 枯 病 (菜豆)	タ ネ バ エ	ア ブ ラ ム シ 類
クルーザー-FS30	360ml	1				○	○				○	○
クルーザー-MAXX	480ml	1		○	○	○	○	○			○	○
チウラム80	120～300g	1	○					○				
粉衣用ペアーカスミンD	180g	1		○		○			○	○	○	

\*大豆で「クルーザー-FS30」を使用する場合、「チウラム80」と必ず併用する。

\*「クルーザー-MAXX」は「クルーザー-FS30」より乾きにくいいため、特に小豆・菜豆は早めに準備する。

\*「粉衣用ペアーカスミンD」は大豆の斑点細菌病、「クルーザー-MAXX」は小豆の茎疫病、菜豆のリゾクトニア根腐病にも登録あり

#### (4) 根粒菌の接種

未接種の種子には、消毒後、最後に根粒菌を接種します。

処理は **クルーザー → 殺菌剤 (MAXXは不要) → 根粒菌** の順で行います。

### < てん菜 >

- ・強風時や、翌日低温が予想される場合、移植作業を中断しましょう。
- ・降雨後、無理な定植・は種作業は控えましょう。初期生育、発芽の不良に繋がります。
- ・風害・湿害対策のため畦間サブソイラー・深耕カルチを施工しましょう。
- ・移植栽培と直播栽培で登録内容が異なるので、除草剤は防除ガイドを参照し適期に使用しましょう。

## 野菜

### < ながいも >

ながいもの催芽湿度は80%が推奨されています。催芽時の湿度が高くなりすぎると良い芽ができず植え付け後に不萌芽となる場合があるため、催芽時の湿度管理が重要です。

#### 1 催芽管理 **～目標湿度80%、目標温度20～25℃～**

- ・いもの表面を乾燥させないように注意する。
- ・1日1回3分程度、「いも」が新鮮な空気に触れるように換気する。

～催芽(不定芽)の目標～  
「分化始」～「分化1cm」の芽を目標にしましょう。



不萌芽になりやすい芽のタイプ→ 換気不足が主な原因

- ・いも優先芽(不定芽の下に小さいもができる) → **高湿度・換気不足**
- ・複数芽タイプ(複数の不定芽が形成)
- ・ダンゴ芽タイプ(未分化のまま肥大、根伸長) → **高温・高湿度・換気不足**
- ・青かびや腐敗が生じた種いもは速やかに除去し、感染拡大を防ぐ。
- ・催芽湿度80%の場合、催芽期間がやや長くなるため植え付け日が近くなっても芽の動きが悪い場合は、換気に注意し加湿する。

#### 2 催芽後の順化

芽が小豆～大豆程度の大きさになったら催芽を終え、順化を行います。順化により外気に慣らし植え付けによる急激な温度変化などを緩和させます。

適正な順化温度は10～16℃とし、期間は3～10日間とする。植え付けが遅れる場合は10～12℃で管理する。

#### 3 耕起作業

ほ場が湿潤な時に深耕すると碎土率が低下し、植え付け溝の陥没やながいもの形状を乱す場合があるため注意する。トレンチャーの作業速度は0.2～0.4km/hを基準とし、チェーン式は超低速の0.2km/hで作業をおこなう。

#### 4 植え付け

- ・植え付け作業は地温が10℃以上になってから開始する。
- ・芽が乾燥したり、折れないように注意をする。
- ・覆土は5～6 cmとする(植付深土が深い：萌芽遅れ 浅い：乾燥による芽傷み)。
- ・種いもにシート等をかけ作業が終了するまで芽を乾燥させないようにする。

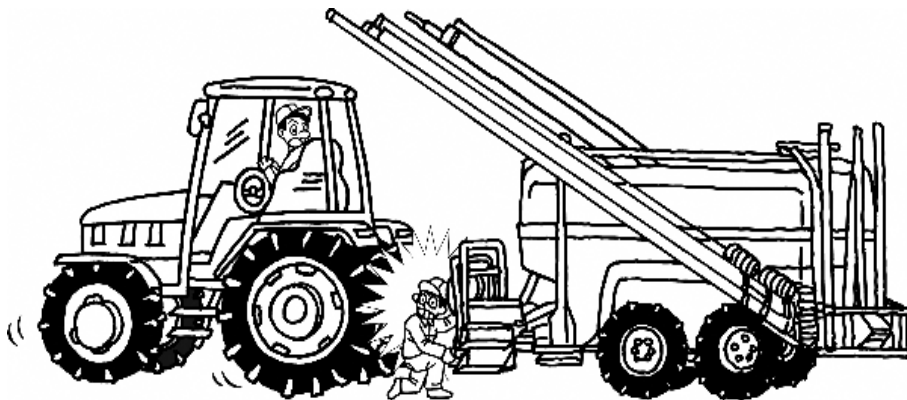
マルチ設置のメリット

- ①雑草の抑制、②地温の確保、③初期生育の向上、
- ④越冬後の腐敗の抑制 (春掘りで越冬時にマルチをはがさず使用した場合)

### ○春の農作業事故防止

春の農作業事故は、機上作業中に足を滑らせ落下する例やトラックのアオリで手や指を挟む例、機械の乗降時に滑り落ちる例が多く見られます。

みんなで声をかけあい、安全作業を心がけましょう！



### ○周辺作物への農薬飛散防止の徹底

除草剤散布など、スプレーヤを使用する作業が増える時期です。

隣接する作物に除草剤などの農薬が飛散すると、生育が大きく阻害されたり、定められた残留基準値を超える残留農薬が検出されることがあります。トラブルを回避するためにも、風の向きやドリフト低減ノズルを使用するなど、周辺作物への飛散に十分注意しましょう。また、散布後のスプレーヤなどの洗浄はしっかり行いましょう。

使用基準を遵守し農薬散布をおこなってください。